

---

# ティオの冒険記

マスケット銃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ティオの冒険記

### 【Nコード】

N3541Z

### 【作者名】

マスケット銃

### 【あらすじ】

一人の少年が冒険に出た。  
名前はティオ・アルペノス。  
魔族の血が半分流れる彼は冒険者だった父に憧れて、十五歳を迎えた日に旅に出る。  
しかし期待と不安を胸に抱いて飛び出したのだが、いきなりとんでもない化け物と戦う羽目に！？  
その後も少年の予想を右斜め上に超える出来事が次々と起こっていく。

それでも少年はくじけずに前へと進み続けて成長していく。  
剣と魔法とモンスターの世界で新米冒険家が成長していく冒険物語。  
と、思いきや、だんだんとんでもない展開に巻き込まれて……！？

## 第一話 旅立ち（前書き）

こんばんわ、初めまして、マスケット銃と申します。  
前作はすぐにやめてしまい、申し訳ありませんでした。  
今回はそうならないよう努力します。

## 第一話 旅立ち

カミール村

この日、一人の少年が旅に出ようとしていた。

名前はティオ・アルペノス。

この地方では珍しい黒の髪が目を引く。

背は低めだけれど冒険家だった父に仕込まれた剣の訓練と森で獣狩りをしているため、体には俊敏に動くための筋肉しかついていない。背が低くて童顔なために彼のことを知らない人間は子ども扱いするだろう。

そして一番の特徴は尖った耳と金の瞳、魔族である母の血が強く出ている。

祖父、父が冒険者であるティオは今日一五歳の誕生日を迎えて、前から決めていた冒険へ出ることになった。

背中に町に着くまでの数日分の食糧と飲み物や旅には必要不可欠なものが詰め込まれたリュックを背負い、使い慣れた片手で扱える幅広の剣を腰に帯びている。

見送るのは両親と村長、彼の遊び友達であるジャック、ポアラ、カ  
一二の六人。

母親であるセフィラがティオを優しく抱きしめる。

「あんまり名前を上げようとして無茶はしないでね。危ないことは加わらないで頂戴ね？」

「僕は冒険者だよ、母さん。逃げてたらなにもできないよ」  
そう言って母の背中を優しく叩く。

息子がそういうことをわかっているセフィラは苦笑して、父の悪いところが似てしまったティオの頬に触れる。

「こづいときは嘘でもいいから親を安心させるものよ」

そう言つて息子の肩をぱんつと叩いた。

父、ガルドラは豪快に笑つてティオの肩にスコップのように大きな手を置く。

「ま、若いうちに痛い目にあつたほうが成長できる。前を進む者に名譽は来るつて言つしな」

そう言つて腰に帯びた剣を強く叩いた。

この剣は祖父が友人の鍛冶師に創つてもらつたもので、父もこの剣を手に冒険に出た。

その後、槍に持ち替えたために剣を使うことはなかつたが、息子がこの剣を持つて旅に出る姿を見ると自分の昔を思い出してしまふ。

息子の姿に誇りを感じるけれど、寂しさも胸の内から湧いてくる。

笑つて気持ちをごまかそうとするけれど、剣に触れる手は震えていた。

「……いいか、手紙は必ずだしてくれよ。何も書くことが浮かばなくてもいい。おまえが無事なのがわかればいいからな」

「もちろん書くよ。町に着いたら絶対に出す」

「それと早く仲間を見つけるんだぞ。一人でできることなんてほんの少ししかないんだ。わかつたな」

「わかつてるよ、父さん」

前から同じことを繰り返す父を安心させるようにティオは溜息をついてしまふ。

自分の言葉を甘く受け止めている息子にもつと言ひ聞かせてやりたいが、あまりしつこく言うのも悪い気がするのでやめておくことにした。

「まあ、そのうちわかつてくるか……」

両親が一步下がると、変わるように村長とジャックたちが彼を囲つ。

村長は年老いてまがった腰をなんとか伸ばして自分より背の高いティオの頭に触れる。

「おまえの祖父も父もこの村を出て行って、この村に戻ってきた。おまえもちゃんとここに戻ってくるんだぞ」

「もちろん戻ってくるよ」

次にジャックたちが次々に声をかけていく。

「帰ったらいるんな話聞かせるよ！ 土産は忘れるなよ」

「ぜったい帰ってきてね！ 私待ってるからね！ 私真珠のネックレスがいい！」

「……カラウラ産の牛が食いたい」

「うん、僕は冒険に出るんだからね。旅行に行くんじゃないんだからね」

仲間たちのちゃかしについ笑ってしまう。

本当はもつと喋っていたけれど、このまま喋っていたら決心が鈍ってしまう。

意を決する様に腰に帯びた剣にそつと触れる。

「それじゃ、そろそろ行くよ」

そう言った瞬間、楽しそうに話していたジャックたちは黙ってしまった。

が、寂しさは隠しきれないけど笑顔でテイオを抱きしめる。

一人だけまだ幼いカーニだけが泣きそうになりながらテイオの服を掴む。

テイオはしゃがんでカーニの頭を撫でる。

「絶対帰ってきてね……」

「うん、いい子で待っててね」

それから拳を当てて村に伝わる絶対の約束を交わした。

村長は両の手を合わせて神に祈りをささげる。

「神よ、この子に厳しい試練と深い慈悲を与えたまえ」

そして一人一人と抱きしめあつた後、セフィラとガルドラに向き直る。

「行ってきます！」

「ああ、行ってこい！」

「いってらっしゃい。風邪ひかないでね」

両親と仲間たちに見送られて、少年の冒険が始まった。



## 第一話 旅立ち（後書き）

はい、主人公が旅に出ました。

これからいろんなことに巻き込まれながら成長していきます。

他の小説とは違った展開になるよう考えています。

特にチート&ハーレム、おまえらの出番ねえから！

……ごめんね、使いこなす自信がないんだ。

と、言うことでアドバイス、指摘などがありましたらよろしくお願  
いします。

## いきなりバトル！（前書き）

はい、いきなり戦闘に入ります。

拙い文章ですが、人が死にますのでご注意ください。

## いきなりバトル！

近い町までは徒歩だと一週間はかかる。

しかし視界の広い草原を歩いていくだけなので急がずに歩いていく。幸い、草原にモンスターは出ることはないし、天気も丸々太った雲が流れている快晴だ。

だから道端に生えている薬草を摘みながらのんびり歩こうと考えていた。

薬草は何種類もあって組み合わせ方で傷に利く薬になったり、腹痛に利く薬になる。

夢中になって摘んでいると背後から声をかけられた。

「おい、あんた。こんなところでなにやってんだい？」

振り返ると、幌馬車にのった商人がテイオを見下ろしていた。

「ああ、町に行こうと思ってたんですが、薬草がたくさんあったんで摘んでいたんです」

「へえ、そうなのか。町に言うんなら乗せて行ってやるのか？」

「いいんですか？」

思わぬ申し出にテイオはパアッと顔を輝かす。

格好を見て冒険者、それも旅の常識もまだ知らない新米だと読んだ商人はテイオの子供らしい反応に、つい笑ってしまった。

「構わんよ。さっきも二人拾ったんだ。一人ぐらいどうってことないさ」

「ありがとうございます」

軽く頭を下げたテイオは商人に駄賃を払って後ろの荷台に乗る。

木箱が場所をほとんど占めているが、なんとか空いている場所を探して座る。

テイオと向かい合うように二人の男女が座っていた。

軽く挨拶をすれば眼鏡をかけた黒髪の女性がにっこり笑って挨拶を返してくれた。

「こんにちわ、君も冒険者かな？」

「はい、あー、えっと、今日村を出たばっかなんです」

「へー、そうなんだ。いーねー。若いねー。」

そう言っただけで人懐っこい笑みを浮かべる。

「私たちも似たようなもんだからわからないことがあったら聞いてね」

歳は20代後半だと思ったが、ふにやっと笑うと幼く見えた。

「あ、そうだ、紹介をしておかなかったね。私はセレハート。彼はトール。無口だけど私のパートナーよ」

「テイオです。よろしくお願いします」

セレハートは魔術師らしく、黒の皮鎧の上に紫色のマントを羽織っていて透明な結晶がはまった杖を持っている。

そしてトールはテイオより2、3ほど歳が上の青年で褐色肌でとげとげした灰色の髪が無造作に伸びている。

胸当てと肘と膝を護るプロテクター、鉄鋼が仕込まれたグローブと動きやすさを重視した軽装備。

己の体を武器とする拳闘士のようなだ。

二人の会話に加わろうともせず、紹介されたときも頷いただけだ。

馬車の振動に揺られながらテイオはセレハートから冒険者としてのアドバイスを聞いていた。

冒険者は仕事を斡旋するギルドでクエスト、魔物討伐や物資調達をする際は最低でも二人1組み出なければいけないこと。

組んだ仲間の短所長所を把握し、戦闘での役割分担をつけておくこと。

また散策するときもメンバーの配置に気を配らなければいけないことなどなど、セレハートは父から教えてもらわなかったことを丁寧に説明してくれた。

「一番やつちやいけないのは単独行動に出るのと道具をそろえておかないことね。  
魔物は弱ってる者や逸れた者を狙うことが多いし、一人で魔物を相手にするのは自殺するようなものなの。」

それに道具を揃えなかつたためにベテランが毒に侵されて死ぬこともよくあることよ。

町の外で生き残るには最低でもこの二つは犯しちゃ駄目ね」

「わかりました」

なんとかセレハートのアドバイスを聞き逃すまいと、書き慣れない文字でメモを取る。

その様子を見ていたセレハートはつい笑ってしまった。

「いやー、なんか久しぶりに反応を返してくれる子がいると、ついでにたくさん喋っちゃうわねー。」

この子、見ての通り無口だから寂しかったのよ」

そう言つてセレハートは隣に座るツールを肘で小突く。

「あんたも先輩としてなにかアドバイスしなさいよー」

「……敵」

「え？」

強めに小突かれても無反応だったツールが急に立ち上がる。

テイオも釣られて外を見てみれば、馬車に向かってくる影が複数見えた。

まだ遠すぎるために姿ははっきり見えないけれど、どんどん近づいてきている。

セレハートが帆をめくつて手綱を操っている商人に呼びかける。

「商人さん、ちょっと問題が起きたみたいよ」

「問題？」

問題という発言に商人は不安そうにセレハートの顔を見る。

「うしろから人が来てるんだけどさ、たぶん盗賊だね」

「なんだって!? ああ、くそ！」

商人は罵声を吐くと馬の尻を叩いて拍車をかけようとする。

しかし荷を満載した馬車が出せる速さも限度があり、追いかけてくる集団と距離がぐんぐん縮まる。

セレハートは帆からわずかに顔を覗かせて、追いかけてくる集団の数と武装を把握する。

「数は8人、弓は持たずに剣か斧を持つてるね。よし、テイオ君は二人ぐらい任せてもいい？」

テイオは鞘から剣を引き抜いて、深呼吸を一度してから頷いた。

「大丈夫です。やれます！」

「人は殺せる？」

セレハートがあっけらかんと聞いてきたために言葉に詰まってしまうたが、気を取り直して頷いた。

「……人を殺したことはありません」

「なら大丈夫だね。ツール、あなたもよろしくね」

声をかけられたツールは軽く頷くと、強張った体をほぐそうと狭い馬車の中で背伸びをする。

今から戦闘に入るのに緊張していないツールに、テイオは驚きを隠せなかった。

馬に乗った男たちは皮鎧を着こみ、手入れをしていない剣や斧で武装している。

盗賊たちはあつという間に馬車に追いついて囲みこんでしまった。その一人が腰帯からナイフを抜いて馬車に投げつける。

「死にたくなけりや止まれ！ 大人しくしてりや命はとらねえ！」

商人は恐怖で顔を強張らせて、盗賊の言うとおりに馬車のスピードを落とした。

馬から降りた

盗賊たちは4人が馬車を囲んで残りが後ろに回り込んで積み込まれた荷を覗き込もうとした。

一人が近づいて帆をめくろうと手を伸ばす。

が、盗賊がめくる前にテイオとツールが飛び出して襲い掛かる。

飛び出したテイオは目の前にいた盗賊を地面に押し倒した。

そのまま相手に反応を取る間も与えずに倒そうとしたが、剣を持つ腕を掴まれて阻まれてしまう。

剣を胸に突き刺そうと力を入れるけれど、盗賊も刺されてたまるかと必死に抵抗する。

なので剣で刺すことを諦めて、盗賊の顔を殴りつける。

盗賊は片腕で顔を庇おうとしたが、容赦なく3回殴って気絶させた。

「このやろっ！」

仲間が斧を振り上げてテイオに襲い掛かる。

振り下ろされる前に横に転がって避けるが、次に繰り出された蹴りを顔に受けてしまった。

「立て、クソ野郎。鱈切りにして喰ってや……!!」

喚きながらテイオに近づこうとした盗賊が白目を向いて前のめりに倒れる。

男の急所を蹴りつぶしたトールは泡を吹いて倒れようとした盗賊の首に腕をからめて捻る。

首が妙な方向に曲がった盗賊はその場に崩れ落ちた。

「早く立て」

頭を押さえているテイオに手を貸して起こすと、蹴られた場所を素早くチェックする。

「傷は浅い。血が派手に出てるだけ」

「あ、ありがとうございます」

残っていた盗賊は遠巻きに二人を囲んではいるが、自分から斬りかかるうとしない。

トールのそばには今さっき殺されたものと別のもう一つ死体が転がっていた。

その盗賊は顔面に蹴りを入れられて倒されると、起きる間もなくブーツの裏で首を小枝のように折ってしまった。

仲間が瞬く間に3人も失ったために、彼らの間に狩られる側の恐怖

が生まれる。

互いに目配せをして先に仕掛けるように催すが、誰も自分から動くうとしない。

「冒険者がいたのか、ちくしょう！ どけ、俺がやる！」

リーダーが毒づきながら剣を構え、ビビッている部下を叱咤する。

トールを恐れて動かなかった部下たちも武器を構えて3人がトールに、1人だけがテイオと対峙する

一番の脅威となるトールを数で片付けようと考えたろう。

だが、脅威が二人だけだと早とちりしたためにその作戦も失敗することになった。

今にも斬りかかろうとした二人の回りにパチパチ火花が散ったかと思ったら、いきなり電気が走って感電させた。

いきなりの出来事にテイオも含めて啞然としてしまった。

感電した二人は死んでおらず呼吸しているけれど、陸に打ち上げられた魚のようにピクピク動くだけだ。

魔法を唱えたセレハートは馬車の上で仁王立ちして盗賊たちを睨み付ける。

「はいはい、あなたたちに勝ち目はないわよ。逃げるなら見逃してあげるから、さっさと諦めなさい」

小馬鹿にした口調に盗賊たちはカツとなって前に出ようとしたが、セレハートの前にトールが立ちはだかると怯えて後ろに後ずさる。

リーダーは完全に飲まれている部下に舌打ちを打つ。

「それとも皆殺しがいいかしら？ あなたちぐらいなら1分も時間はかからないわよ」

しばらくセレハートとトールを交互に見ながら考えていたが、やがて剣を鞘におさめて両手を上げた。

「……チ、わかった。俺たちの負けだ」

そう言つて部下を叱咤して馬に跨る陽に命令する。

「今日は運が悪かった。あんたたちみたいなベテランの冒険者とぶ



「つかっちまうなんてな」

「あら、生きて帰れるのよ？運がいいと考えなさいよ」

「言ってる」

リーダーは肩をすくめると、未だ剣を構えているテイオを見て鼻を鳴らす。

「武器はしまいな、ルーキー。おまえらの勝ちだ。いつまでもガチガチになってんじゃねえよ」

「な、なんだと！」

敵に馬鹿にされて顔を赤くしたテイオがリーダーに掴みかかろうとしたが、軽く腕をひねあげられて返り討ちにされてしまう。

「あいたたたたっ！」

「まだまだ素人に毛が生えた程度だが、ま、頑張ればいい線行きそうだな」

そう言つてテイオを突き飛ばすと自分の馬のもとへ歩き出そうとした。

怒りも収まらないテイオは去ろうとする盗賊の背中を睨み付ける。

「仲間が殺されたのにサバサバしてましたね……」

「うーん、盗賊稼業もつらいからね。そういうことには慣れちゃったんじゃない？」

「慣れるんですか？」

「慣れるしかないの」

突然耳障りな羽音が鼓膜を打つ。

テイオが驚いで見上げれば、人よりも2匹大きな蜻蛉が頭上を通り過ぎるところだった

しかもその蜻蛉は長い鎌状の前足で鎧を着こんだ人間を運んでいた。去ろうとしていた盗賊たちも驚いて声を上げる。

セレハートが長い溜息について額に手を当てる。

「勘弁してよー。なーんでこんな所でアイアンドールが見つかるかなー」

2匹の蜻蛉はテイオたちの頭上を飛び過ぎた後、ゆっくり旋回して戻ってこようとしていた。

トールはなにが起きているのか理解できておらず茫然としているテイオの肩を叩いた。

「構えろ、死ぬぞ」

どうやら本当の闘いはこれからのようだ。

いきなりバトル！（後書き）

はい、盗賊との戦いは終了しましたが、次はもっとやばそうなのと戦います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3541z/>

---

ティオの冒険記

2011年12月16日02時52分発行